



金子光晴全集



第十四卷

金子光晴全集 第十四卷 著者金子光晴 裝幀者司修 発行者
高梨茂 印刷者山田博 発行所東京都中央区京橋二丁目一 中央
公論社 電話(五六一)五九二一 振替東京二一三四 ©一九七六
昭和五十一年八月十日印刷
昭和五十一年八月二十日発行



訳 詩

目次

ブエルハアレン詩集

ランボオ詩集

アラゴン詩集

悪の華（ボードレール）

後記

5

105

209

285

445

ブ
エ
ル
ハ
ア
レ
ン
詩
集

フェルハアレン詩集 目次

緒言	7
嚴寒（二月）	9
貧者（二月）	10
小さな處女（五月）	10
セント・ジャンの祭（六月）	11
蠅（八月）	12
狩獵（十月）	13
海の方へ	15
都市	18
平原	21
乞食	23
鋤	25
都市の魂	26
雨	30
漁夫	32
バラダイス	34
樹木	40
我家のめぐり	43
世界	46
山嶽	48

48 46 43 40 34 32 30 26 25 23 21 18 15 13 12 11 10 10 9 7

群衆	52
森	56
水の唄	58
散歩	61
並木の第一の樹	64
明るいつ時	66
午後の刻	72
夕暮の時刻	78
新しい都會	83
我都會	88
花々に寄せる	90
十一月	92
小舟	92
修道士の臨終	93
朝	95
黄昏	95
修道士の歸途	96
穀倉	99
果樹牆	99
パン製造	100
風の禮讃	100

100 100 99 99 96 95 95 93 92 92 90 88 83 78 72 66 64 61 58 56 52

緒言

讀んで意味のよくわかること、氣持よくよめることが翻譯、殊に詩の翻譯などといふ大きな仕事の上に、一番大切なことと思つてゐる自分は、逐字譯だとか、むづかしい考證的な感情をすべて捨ててしまつた。殊に、語學ときたら貧弱な自分だから、コマコマした誤りはあらかじめ許してもらつて、先づ、原作者の詩が、どんなものであるかを呑みこめることを肝要としてゐた。

エミール・プエルハアレンは、一八五五年五月二十一日、白耳義、アントワープに近いセン・アマンに生れ、一九一六年十一月二十七日ルーアンに於て、汽車に轢かれて悲惨な死をとげた近代の大詩人の一人である。

彼は、その幼稚時代を、フランドルの田舎で暮した。詩集“Les Villages illusoires”にあるものは、當年の生活の思出によつたものである。彼は嚴肅な教育を、ブルッセルのセン・ルイ學校に、次いでガンのセント・パルプ學校に於てほとんどされたが——その頃からもう人しれず、詩章を愛讀したり、作つたりしてゐたのであつた。

十八歳のとき、學校を出て、叔父の企業を助けるために、

故郷のセン・アマンへ歸つた。然し、彼は、産業の方にはほとんど趣味がなく、どうにかして、辯護士になつてみたいといふ望が強く、仕事場へ來てから一年ほど經て、遂に、ルーブアンの大學へ法律專攻の許を得て行つた。それからブルッセルの辯護士組合へ登録される様になつたが、彼は少しのひまをみては、詩作生活をつゞけ、遂に、一八八三年“Les Flamandes”といふ標題の詩集を出した。辯護士の興味は、段々詩人の方へ移つていつた。

その後十五年間、彼はブルッセルに住んでゐたが、一八九八年から世界戰爭の始まる年まで、フランスと、ベルギーの間を、冬はサンクルードに、夏はブルッセルといふ風に規則的に住居を變へて生活した。

が、彼の旅行に對する熱情は、ちつとも同じ所に落ち付かず、英國、西班牙、伊太利、ドイツ、オーストリア、ロシア、スミスと常に、新しい自然の風貌を求めて流轉し歩いた。その昔、哲學書や、科學書に對した大きな興味も、段々、かう云つた直接な經驗の方へうつつてゆき、ビブリオテークよりは、大自然の方へ没頭していつた。

非常に信心深い家庭に育つたので、彼も少年時代は、敬虔なカトリック敎の信者だつたが、現實生活にふれるに従つて、その神から離れざるをえなくなつてしまつた。

“Les Dédaches”とか“Les Flambeaux noirs”とかいふ

絶望的な標題の詩集は皆、彼の憂愁煩悶の叫び、慘酷な苦しみやその幻影を示したものである。

然しこんな精神上の危機に際して、勇ましくも彼は、再び此人生を、狂人の様に愛着した。そして、たてつづけに三十冊近い詩集を發表した。それらの詩は皆、生に對する驚歎にみちた絶大な信用の文字で、新しい、絶對的な最大權威ある一の宗教、世界の宗教を説いたものである。一切は彼にとつて、凱歌であつた。彼の周圍はすべて詩であつた。

科學の進歩も、現代の文化の驚異も、都會も、港も、製造場も、停車場も、機械も、彼の炎のやうに燃え上る詩句の中に、光榮化されて見えてきた。

“Les Villes tentaculaires” “Les Visages de la vie” “Les Forces tumultueuses” “La multiple splendeur” “Les Rythmes souverains”などの詩集は、その白熱的表現であつて、バルナシアンや、象徴派の表現を突破して、狂熱的な、自由な一の表現を創設したものである。アルベル・モークルが、彼をさして『發作の詩人』といったのも故あることである。“Les Heures claires”の詩片、明るく時、正午の時、夕暮の時、彼の最も楽しい結婚當時の記録であつて、彼を好まない批評家にも、彼として出色の作であると評されるものである。大戦始まるや、彼の英雄的情熱は、ドイツの暴虐にむかつて、詩集“Les Ailes rouges de la guerre”

“La Parmi les cendres” “Villes meurtries de Belgique”
等を出版して、反抗した。

大正十四年二月

著者

嚴寒（一月）

嚴寒酷烈な夕かたまで、
衰へやつれゆく

微灰と、暗雲の層。

夜目にも白く、冬はさらばふ。

運命に虐げられた者のやう、
耕土、畑地は、さしも老慙し、死にはてて眠る。——こ

こに春の呪文を殖くは誰ぞ。

たゞ遠く、西の方へ、

その物憂げな餘韻悲しく、あわたしく

貧しい晩禱の鐘、雪の上に残る。

藁屋根と、家畜小舎は、

そが悲傷を裂開くがごとく

さしも、憂愁ふかく立現はれた。

庭園の内、生籬添ひに、

揺れる物干竿の先に、

風に洩き、凍りついた

田舎男の灰色のシャツを人は見た。

殊に寂れた小村、小村は、

その小屋や、繞壁園囿を緊束し

その恐怖をもかき集む。

さて、その家居は廢れし街道に竝ぶ。

扉口のどの竈にも

切り取られた光線が

斜に沁り入る。

雪は、平原の只中に、

その羊毛と、房を撒きこぼす。

地平の涯の沈黙の太木は、

遠く、遠く永遠の方へ

警戒隊のごとく立竝び、

畑をこえ、地平の空かけて、

消えぬがにも、

微細な檻樓屑が投げられる。

大地は白く、鮮かな物影にみつ。

十字街に、曙空の十字架が、

重い空の苦痛に向ひあひ、

基督像をかゝげてゐる。

然し、その胴體から流れる純い血も、
遠く、遠く小皺疊める
地の胸の
殘忍な霜を暖めえぬ。

嚴寒酷烈な夕かたまけ
年月も忘れはてて
凍りついた『時』のめぐりを
夜目にも白く、冬はさらばふ。

貧者（二月）

そは、墓地の石のやうに、
蒼ざめた、
涙の湖をたゝへた
かくも憫な心根。

そは、砂丘の、
鳶色の伏屋の屋根よりも
重荷と、苦痛に猶重い
かくも憫な背。

そは、闊の上に
黄に朽ちて彷徨ふ木の葉の如き、
あるは、路上のそのの如き、
かくも憫な掌。

そは、嵐の夜半、
驚きまどふ家畜らの瞳よりも、
氣づかはしげな、人のよい、且つは貧しく、
かくも憫なまなざし。

そは、又、大地の續く限り、
悲まさりゆく土の上を、
寛大に、倦げな振で歩みゆく
かくも憫な男達。

小さな處女（五月）

小さな處女マリアは
五月の夕、牧ぞひにゆく。
靄を透して、輕ろげな雙の素脚。

羽の様に白い二つの脚。

西班牙王女の様に過ぎてゆく。
まつすくな胸衣、ふくれた裳、
その帯には、銀の念珠が
揺れる度毎、朗らかな響を立てる。

小川の兩岸は、

群れる花菱の束に推されてゐる。

然し、處女は、岸から岸へ、

たゞ、劍狀に

水邊に突立つ

王様百合の花のみ索す。

そして、彼女は指の先で、

繁れる植物の葉脈のなかに

エメラルドの翼で眠る昆蟲を、
離れじとするを軽く引離した。

又、優しい其腕は、

道傍の繫杭で新芽を喰ふ

羊を近く引寄せ

そつとキツスしてやり、摩つてやり
おとなしく元へ歸してゆく。

それから此小さな處女は、

戦勝標の様な枝枝が、

澤山な神話を蔽うてゐる

牧場の古い菩提樹をさがしにゆく。

こゝで、虔しく、三つの呈物を、

その昔、矢張彼女と同じ様に、

牧場の善い處女であつた

めづらしき領主の御代の、

大樹の下の美しい仙女らに呈げた。

セント・ジャンの祭（六月）

河岸で踊れ、炎の團樂よ。

小さなマダムよ。

可憐げな小さなマダムよ。

大川にも、池沼の畔にも、

セント・ジャンの夕暮は迫る。

岸の上で踊れ。炎よ。

お前を取まく鳶毛の子供達と、一緒に、
戯けた木屑よ。愚かな輪舞よ。

踊れ、踊れ、踊れ、

野原の小さな炎よ。

小鳥は、お前を觸めて囀る。

小さなマダムよ。

風は、お前を鞭撻し、眞赤に染める。

小さなマダムよ。

司祭は、ゆきずりにお前を讀めてゆく。

小さなマダムよ。

濃紫なす地平に、薄暮は迫る。

踊れ、踊れ、小さなマダム、

憂ひも、悲しみも踊つてしまへ。

すでに。夜は、その闇影は、

大川の邊に添ひ、

寡婦のやうに移ろふ。

踊れ、踊れ、もつと、もつと、炎よ。
在天の大神のおんために、

も少し 踊れ。

そして、お前の心を擽げよ。

お前の炎でゆらめく心を……。

うつり氣な小さなマダムよ。

蠅（八月）

卓は脂肪染み、殘物は猶熱い。

晝食に飽満うた男たちは、

槍の穂先の様な、

長い蒲の金の穂を織りに行つた。

眞夏炎熱は天を龜裂らせ、暑い沈黙を苛立たす。

太陽に蒸された麵飽焼場の

敷石のたゞきの上に、銀の皿小鉢に、

無作法な肉刺のうへに、

投出した小刀のうへに、

唸る蠅の黒い群衆が簇がる。

縞の腰細蜂と、毛の生えたへば蜂が

この食食な蠅群と、

入交つたかと思ふと又離れる。

麥酒^{ビール}滓と、乳汁に濡れた

古い食器棚の上の

玻璃類の汚れた縁を……。

まつしぐらな蠅が、

硝子窓にぶつかつてはおちる。

新しい蠅の一群が、花園から歸つてくると

唸聲は一層柔軟になり、

一層惱ましくなり、

至る所に、蠅は二匹づゝ番になる。

これこそ狂ほしく旋巻く昆虫の祭である。

活々した脚、敏捷な翼、

褐色のコルセットが、

光と、花々の炎のケルメス祭となつて

烟や、生簾や、田舎舎を渦巻いてゆく。

六月は逝き、七月は亡び、今は八月、
そして、小休もない狂氣の喧噪は昂まりゆき

火の氣もない部屋の隅に、

脚かじかんで死んでゆく

あの十月、十一月の

小數立つ日頃迄續くことだらう。

狩獵（十月）

狂噪ぐ樹葉。饒舌の小葉。

なべて黄色くなつた森に、

黄色い言葉が、緑の芝生にそゞろ。

夏は逝つた。

霧はすっかり蔽布を掛けた。

鹵簿もなく、衰ふる火焰は、

一條の壯麗な雲間に開く

その終の扉口から

夏は、去つた。

あゝ、もう夏はいつた。

そして狩人の帶に吊した小鳥の様に

重たく、屍となつた

あゝ、今はその秋だ。

秋よ。秋よ。

野獸たちのひそみ集る

叢林の奥より辛い匂はみなぎる。

熟れし秋よ。物たるい秋よ。

褐の匂、樹脂の匂新しく

夏立ちそめてよりこゝの林をめぐる。

泡と黄金、絹と天鵞絨、

騎者達と其驛馬が

重たい蹄鐵で

忽ち畑や、密林を叩いてくる。

その韻律的な轟雷は近付き

反響をかへし、土煙をあげて、

警鐘のごとくにも氣配は、

大氣を振盪させて擴がる。

獵の群は過ぎてゆく。電光の様だ。

騎馬の風に鞭うたれ、

引つちぎられた木の葉つばが、

襦袢や、脱羽の様に旋卷いて

あたり近所に飛散らふ。

それ秋よ。情熱醉へる秋よ！

獵獸の血で眞赤な掌よ！

地平を環る血液の

たゆげな飽滿の秋よ！

又、渺か谷間に、靜流の岸に、

恰かも柱戯させるごとく、

竈と、納屋が蹲る。

小さな鐘樓ある小さな村、

貧しい小舎と、

寒がり錢なしの憫な人達、

—— 悲しみの涯に秋は坐洲してゐる ——

—— その寺院の

壊れた風琴で

死八日祭と

—— 十一月一日祭を祭る ——

秋よ、秋よ。

獵の群は過ぎてゆく。電光の様だ。

重つ苦しい荊棘や、腐れた沼地に、